

樽田勇樹氏の発表についての

質疑応答

(質問者 1 名)

【質問】 安部浩 (京都大学)

一 樽田氏によれば、ハイデガーの「アリストテレスの現象学的解釈」講義 (全集61巻) の論点の一つは、「存在としての存在者に関わる認識する振るまい」(7頁)と定式化されうる古代ギリシアの哲学観が(1920年代初頭当時の)現代哲学においては「異化」されざるをえぬことにある。すなわちそれは、「この振るまいにおいて、この振るまいにとって、この振るまいを〈持つこと〉のその都度の存在(存在意味)が、一緒に決定的に要事となる」(12頁)事態が新たに出来ることである。だがこうした哲学観の転換の鍵となる〈生の振るまい(或いはこの振るまいと存在者との相関関係)そのものの自覚化〉はそもそも如何にして可能か。万一卑見に誤りなくば、この自覚化の契機として樽田氏は(歴史的生の問題が顕然となった)「今日」の精神的状況を専ら重視しておられるようである(誤読の節は予め謝答の上、御叱正を乞う次第である)。

しかしながら仮にそうであれば、かかる論点だけでは、ハイデガーの意に満たぬのではないか。何とならば樽田氏の御発表では論及されていないものの、同講義に従えば、存在者への自らの振るまいを形作っている「前構成(Praestruktion)」と「反照(Reluzenz)」の運動を通して、我知らず世界に固着して生きるようになること(ハイデガーの所謂「転落(Ruinanz)」)、かくて今や生自身を専ら世界の方から解しつつも、この自己解釈を自覚することなく、自らの振るまいの如何を不問に付した儘であることが事実的生の常であるからである。よって上述の〈振るまいの自覚化〉は、当の事実的生による「転落に対抗する動き(gegenruinante Bewegtheit)」(GA61, 153)を要する。この動きのことを「哲学的な解釈の遂行の動き」(ibid.)とハイデガーが呼ぶ所以もまた、蓋しここにある。

そこで樽田氏に先ず次の点を御尋ねさせて頂きたい。哲学観の転回を論じる際(ハイデガー自身が問題にする)「転落に対抗する動き」を何故に(少なくとも明示的には)論究なさらぬのか。或いは氏の御考えでは、「今日」の精神的状況、そしてそこにおける歴史的なるものの前景化は、この転落に対抗する動きを既にして含蓄しているのか。もしそうであるならば、それを詳論するに、両者(「今日」の精神的状況と転落に対抗する動き)の関係や如何。

二 第一の問いに付随して、以下の小さな問いに関しても御伺いしたい。樽田氏は「哲学す

ることがそこから出来してくる『もと』を「歴史的偶然性（運命性?）」(9 頁)や「運命」(14 頁)に求める興味深い論点を提起しておられる。その際、これらの概念は何の謂であるのか。またこうした偶然性や運命と、事後的生の時間性——就中「事後的生の無」(GA61, 145 usw.)とその「時熟」(Vgl. GA61, 147)——との関係をどう御考えになるか。

【回答】 樽田勇樹（京都大学）

まず、ご多忙の中で拙論にご質問をくださり、自分の考え全体をあらためて問い直す、またとない機会をお与えくださいましたことに、心より感謝申し上げます。

一 「私の論は何故「転落に対抗する動き」を明示的には論究しないのか。

ご質問にお答えするにあたり、まず、私なりに先生の問いかけの意図を理解・再述させていただくことをお許しいただきたい。

上の問いかけが基づいている私の論へのご理解とご疑念は、先生の第一段落に集約されており、3 点にまとめられる。

①私（樽田）の主張のまとめ。1921/22 年講義のハイデガーは、ギリシア的哲学理解を現代の立場から異化する哲学理解を提起している。

②しかるにこの異化は、「生の振るまいそのものの自覚化」を前提しているのでなければならない。

③私（樽田）は、この「生の振るまいそのものの自覚化」の契機を、「専ら」「『今日』の精神状況」にのみ見ている。

・・・先生の問いかけが突こうとされている私の論の「盲点」は、③にある。

・・・その際、③の〈専ら（「今日」の精神状況にのみ）〉ということで先生が何を考えておられるかは、次の段落から明らかになる。すなわち、ここで先生は、〈事後的生にいわば内在的な *Bewegtheit*〉と差し当たりは分けられるべきであるような、〈(事後的生にとって外在的な)「今日の状況」〉を念頭におかれており、このように分けられた二つのうち、私が「専ら」後者に件の「契機」を見ている、とされている。そしてそれに対して、「生の振るまいの自覚化の契機」として〈片方をあげるだけでは不十分でないか〉との問いかけをなされている。否、先生のこの読み筋を徹底するなら、その意味はさらに次のように理解すべきかとも思われる（これは読みすぎかもしれない）。すなわち、〈事後的生に内在的な *Bewegtheit*〉こそが件の「契機」として「より先なるもの」であり、それに対して私（樽田）の言う『『今日』の状況』なるものは、取るに足らないものではないか、と。あるいは〈かりにそうではないにしても、私の論のようにするとき、前者はどこに行くのか〉、と（もしこれが、私の「読み過ぎ」であれば、深謝申し上げますとともに、次回お目にかかる際にご叱正賜りたく、切にお願い申し上げます次第である）。

(もう1点付け加えておけば、②～③において、先生は、私の論の問題設定が、先生の言われる「自覚化の契機」をまず第一に論じることを要するものであると、あらかじめ理解されておられるようである。)

そのように理解するなら、先生の問いは、卑見によれば、ハイデガーの時代にまさに「歴史的な考察と『体系的』な考察との間の密接な関係」(56/57, 132)の如何をめぐる問題として言われていた問いに、通じていくものであるように思われる。それは、1919年のハイデガーが「止揚されるべき」ものと述べ、1927年のハイデガーがヨルク(およびディルタイ)の文言の引用によって自らの基本的立場を示唆していた問題である。したがって、先生の問いに正面から答えるには、まずは、ハイデガーがこの問題の図式そのものをどのように把握し解体しているかについて、私なりの解釈を示すべきであるようにも思われる。しかるに、ここではそれがなしえないので、もっぱら私の論の問題設定について弁明する、という仕方でのみ、応答させていただきたい。

私の論へ先生から賜ったご理解として、上のような私の理解が正しいとすれば、先生の問いの背後の疑念に関しては差し当たり、次のようにお答えしておきたい。先生の強調された「生の振るまいそのものの自覚化の契機」ということを言うなら、私は、先生が理解されている意味での『『今日』の精神状況』のみを考えているわけではない。——しかるに、さりとて私は、先生が理解されている意味での『『今日』の精神状況』——というのも、先生のご理解ではそれは事実的生そのものにとって外在的・客体的なものに見做されているように思われるから——が、件の「対抗的 *Bewegtheit*」をすでにそれだけで含蓄していると、考えているわけでもない。

先生があえて強調された〈事実的生に内在的な対抗的契機〉に対し、私のそもそもの問題設定の方からしかるべき場所を与えるなら、次のようになる。すなわち、私の論の主題である「異化」を(先生が言われる意味で)可能にする「自覚化」の、いわば初発的な対抗運動的契機は、「異化」される前の哲学ないし哲学理解において、すでに含蓄されているのである、と。

本論で述べたように、そもそもハイデガーが哲学をはっきりと「哲学すること」(すなわち、或る「振るまい」と言うのは、プラトンの文言を引くことにおいてである。その際ハイデガーは、明示的に「洞窟の比喩」をも参照し、あるいは「魂の転換」という言い方をも参照している。すなわち、日常的態度に対する或る反転の契機、対抗の契機を、すでに「異化」以前の哲学理解はあらかじめ「内蔵」しているのである。

このことを踏まえて私の論の問題設定について言うなら、ハイデガーにおける「今日」の状況からの哲学理解の「異化」という主張は、生内在的対抗的 *Bewegtheit* としての「自覚化契機」そのものが、「今日」状況から発生する、というような主張を含んではいない。私の主張の焦点は、先生の言われる「自覚化」契機＝対抗的 *Bewegtheit* そのものの発生を問

題にするようなところからは、少しずれたところに置かれているのである。すなわち、私の論が焦点を置く「異化」は、対抗的 *Bewegtheit* というものの自己解釈そのものが「異化」されるところに、焦点を置いている。この「ところ」は、あらかじめハイデガーが「事実的生」の原構造として（そういつてよければ）「体系的」に解釈し理論化していったところから見るのでは、見えにくくなる論点である。

卑見によれば、当該講義の、本論で扱った箇所より後の「事実的生」に関する議論は、上の意味で「異化」された対抗的 *Bewegtheit* が有るあり方の原構造を、解釈的に記述するものである。そしてこの意味においてなら、本論が先生の言われる「契機」を論究する必然性もあるが、しかし本論でそれがなしえなかったのは、それが本論の問題設定にとって最優先に言挙げすべきものではなかったからであり、なおかつ、そこまで論究するには紙幅があまりに足りなかったからにほかならない。

——以上で、はなはだ不十分ではあるが、第一の問いへのとりあえずの応答とさせていただきたい。

二 「哲学がそこから出来してくる『もと』の「歴史的偶然性（運命性？）」「運命」といった論点について。

不本意ながら、第二の問いかけに関しては、まだ本論で述べたことより以上のことを述べる準備が私にはないことを、告白せねばならない。ただし、述べただけの論筋に関しては、それほど不明はないつもりである。今再述するなら、次のようなことを申し上げたい。それは、哲学が哲学自身に関する何らかの自覚とともにのみはっきりと始まるとして、本論で述べた「異化」の議論が正しければ、その自覚知にたとえ未彫琢であれ含まれるはずの、哲学の振るまいの成り立つ原状況（およびそれについての知）は、それ自身、歴史的に到来したのものとして考えられねばならなくなる、ということである。そこでは、神的（自然的ないし超一自然的）存在者の、自らは動かずして動かさしめるという *Bewegtheit* に巻き込まれるような形で哲学の振るまいを自覚し、根拠づけるような行き方は、なしえなくなる（というより、このような言い方しかまだできないのだが、「脱臼させられる」と考えられる。すなわち、「歴史的偶然性（運命性？）」という語で示唆しようとした問題状況を、私はいわゆる「形而上学」的な哲学の根拠づけ方に、対照させようとしたのである。もちろんこれでは、まだあまりに粗雑な図式ではある。しかし、それでも私は、このような図式が大略を示す方向性に、ハイデガーが哲学を問う際の彼独特の（異化された）方向性が、見て取られると考えている。

——以上、こちらもまたはなはだ不十分ではあるが、第二の問いかけへの応答とさせていただく。